ロープを使い濁流を渡る消防団員（三和小学校前）

災害を経験した人

元気付けて励まそうと心がけました

柴田　勇さん（三和町）

その日は4、5日前から雨が続いていたことから、市では警戒態勢を取っていました。私は連絡所に待機していましたが、午後6時に警戒態勢が解除になり、自宅に帰宅しました。

しかし、午後8時過ぎから、雷を伴った非常に強い雨が降り始め、翌日の午前2時ごろまで降り続きました。

雨があがった午前4時ごろから、状況を確認するためにバイクで家を出ました。上廿屋から回り始めましたが、谷から道路へ土砂が流れ出しており、まともに走ることができませんでした。南へ行くに連れて、状況は悪くなっていき、下廿屋からは徒歩で移動しました。

流木や土砂で埋め尽くされた道路を必死に歩き、午前7時に連絡所手前の大三和橋までたどり着きましたが、橋は流されていました。

とにかく連絡所へ行かなければということで、対岸にいる人と協力してロープを2本張り、決死の覚悟で対岸へ渡りました。

川浦の状況を確認するため、再び川を渡り北へ向かいましたが、激流が道路を削り取り、田畑や道路は土砂や流木で埋まり、どこが道路か川か分からないぐらい荒れていました。家を流された所もあり、すっかり姿が変わってしまいました。

町民は、皆さんショックを受け、言葉が少なくなっていました。しかし、私が下を向いていてはいけないと思い、元気付けて励まそうと心がけました。激じん地の指定を受けてからは、町民に活気が戻り、復興に向けて協力し合っていくことができました。

今後再びこのような悲惨な災害が起こらないようにするために、地域によって災害の発生する状況を理解し、大雨が予想されるときの事前状況の把握と的確な判断が、必要になってくると思います。

▲柴田さんは、災害当時三和連絡所長として、復旧にご尽力されました。

▲柴田さんから話